

(算数)

## 児童がより学びたくなる授業展開の工夫「算数科を通して」

### ～長橋小学校 3年間の歩み～

大阪市立長橋小学校 川西 宏佳

#### 1. 子どもたちの実態

本校は、家庭環境や生活背景の厳しさから遅刻や欠席をする児童が多く、「やる気無い」「授業、おもんない」「全然分かれへん」など、学習や授業に消極的な発言が多かった。また、授業になかなか参加することができず、チャイムが鳴っても教室に戻ってこなかったり、教室を抜け出したりしている児童もいた。本校の『全国学力・学習状況調査』結果では正答率が低い児童が多く、全体的に無回答の割合が多いことが毎年の傾向として見られた。さらに、昨年度から実施されている『大阪市小学校学力経年調査』においては、特に高学年で全体的に大阪市平均よりも大きく下回っていた。この要因として、既習学習の積み重ねが不十分で基礎・基本の学力が十分に身に付いていないため、初見の文章に対して意欲がもてず、問題文を読むことから諦めてしまうことが一つの要因であると考えられた。また、日々の授業においても、不規則な生活習慣や学習内容が分からないことなどが原因となって集中力が持続せず、授業内容の理解に結びつかない児童が多くいることが大きな課題となった。

#### 2. 子どもたちと向き合う “太陽作戦”

本校は、まず、今一度子どもたちと向き合うため、反発する子には、必ず理由があるという前提のもと、「声かけは否定形ではなく肯定形で」、「とにかく少しでも頑張りが見られたらほめる」、「愛情不足やストレスからくる様々な行動にも温かい気持ちで包み込むようにしよう」と、イソップ寓話の「北風と太陽」になぞらえて “太陽作戦” を展開した。手っ取り早く強引に物事を片付ける北風のようなになるよりも、ゆっくり着実に言う優しく温かい言葉をかけ続ける太陽のような存在になることを心がけた。

#### 3. 研究の始まり “より学びたくなる” をめざして

子どもたちの実態を踏まえて課題解決のため、新たに研究教科を算数科に定めた。これがこの3年間の実践の1年目（2015年度）となる。主題は『児童がより学びたくなる授業展開の工夫～算数科を通して～』とし、特に、“より学びたくなる” というところに焦点を当てた。まず、子どもたちの興味・関心を引きつけるような授業づくりをテーマにした。教科を算数科に設定したのは、基礎的・基本的な学習内容が定着していないということ、またICTを駆使し、伝えたいことを視覚化・焦点化すると、集中して話を聞くことができることがあることに気づいたことが理由であった。研究の視点には、①児童の知的好奇心をくすぐる発問の工夫、②一人ひとりが課題解決できる支援の工夫、③ICT等を活用した視覚・聴覚支援の工夫とした。

この1年間はとにかく『授業を分かりやすく！楽しく！』ということを中心に心がけた。子どもたちの興味・関心に基づいた、授業の中での教員の“しかけ”を多く取り入れることで、子どもたちが授業に、そして教室に向かう姿勢を大切にしたい。また、iPadの計算アプリを活用したり、個人の考えをスクリーンで映し出して全体で共有したりするなど、どの子も楽しく意欲的に授業に参加し、子どもにとって分かりやすい授業を展開した。

#### 4. 「すべての児童を学びの場に」と「宿題忘れの“ゼロ”化」

研究の2年目にあたる2016年度は、1年目の研究や「大阪市スタンダード授業モデル研究校」の取組の成果、そしてこれからの課題をふまえて、研究の視点の見直しを行った。1年目の成果として、子どもたちの学ぶ姿勢・態度は大きく変わり、ほとんど全員が教室に入れるようになり、“わかる授業”への素地を築くことができた。しかし一方では、教師主導でめあてや考えが提示されたり、問題文の読解が不十分なために問題解決の見通しを立てられなかったりするという実態があった。そのことをふまえ、研究の視点の③ICT等を活用した視覚・聴覚支援の工夫はそのまま残し、①の視点を「一人ひとりが課題解決できる支援の追究」とした。また、②の視点においては、「すべての児童を学びの場に入れる授業展開の工夫」とし、前年度でも効果的だったペアやグループでの活動を授業の中で積極的に行い、子どもたちが発言する機会を増やすことで、一人ももらさない授業づくりを心がけた。

また、授業実践と並行して、この2年目に大きく力を入れた取組として、「宿題忘れの“ゼロ”化」を目指した。年度当初に「家庭学習の手引き」を、その後に「家庭学習啓発マンガ」を作成し、宿題の大切さを伝えると同時に、“時間・場所・集中”という3つのキーワードを出して、子どもたちはもちろん、保護者へも分かりやすく啓発を行った。さらに、毎月行われる学力向上部会の中で、各学年から宿題の未提出件数を集約し、また、特に忘れの多い児童をリストアップして、その子に向けた具体的な支援などを交流し合った。この取り組みの結果、宿題の未提出は“ゼロ”に近い数値となった。

#### 5. 3年目の成果と子どもたちが『考えたくなる“しかけ”』

研究の3年目にあたる2017年度は、2年間の研究をふまえて、まとめとなる大切な年度となった。研究の視点においては、特に大きな内容の見直しはせず、さらに児童の主体性を引き出すべく、視点②において、アクティブ・ラーニングといわれる、主体的・対話的でより深い学びにつながるように、内容を追記した。また、子どもたちが自ら課題解決できるように、これまで行ってきた子どもたちの興味・関心に基づいた、授業の中での教員の“しかけ”から、子どもたちが『考えたくなる“しかけ”』を多く授業の中に取り入れるようにした。具体的には、与えられた問題が結局何を問う問題なのかをすべての子どもたちにとって考えやすくするために、問題解決の道筋を視覚化・焦点化したり、見つけた答えに対してゆさぶりをかけたりして、児童が教師の代わりに説明を行い、児童同士で意見を交換するようにして、対話的でより深い学びに迫るようにした。

#### 6. 3年間のまとめ

これまでの取組を通して、子どもたちの変容は大きな成果といえる。授業に向かう学習態度・学習意欲の向上が顕著に見られた。また、少しずつ教師主導から子どもたちが自ら問題を解決しようとする主体的な学びになってきた。さらに教員もより質の高い授業づくりの実践を考えるようになり、今まで以上に児童にとって効果的な支援や授業展開の工夫を取り入れる意識が高まった。しかし、一方で課題も多く、特にまだまだ全体的に学力は低いという現状がある。引き続き、子どもたちの学習内容の定着のために教員が尽力し、より効果的な授業実践を行えるように研究を推進していく必要があると考える。